

『冷笑』の位置とその性格を規定するもの

中 島 国 彦

永井荷風の長編『冷笑』（明42・12・13—43・2・28、「東京朝日新聞」）が帰朝後の作品の中で最も問題性を持った作品であり、荷風の作品系列の上で一つの大きな区切りになった作品であることはいうまでもない。対照的な性格を持つ『すみだ川』（明42・8—10稿）と共に、一つの頂点を形作っているわけだ。しかし、作品

という一見議論の多い、それ故に文明批評を意図したとされる作品の後に、あの『すみだ川』が書かれていた方が充分納得がいくし説明もし易いのだ。しかし、事実を避けて通るわけにはいかない。その上、この『冷笑』の位置の問題は、おのずから作品の意味づけとも深く関係しているのである。

これまでの研究はこの基礎的な問題に対して、明確な答を与えようとして来ていないように思う。その中で、高田瑞穂氏が最もこの点に接近しようとされている。高田氏は『冷笑』の意味を考察して行く中で、その位置づけを考慮して次のように指摘しておられる。

が実際は逆に作品の意味を總体的に把握することが難かしいものである。『冷笑』はそのよい例であろう。作品の到る所に『冷笑』を論じるきっかけがあるにもかかわらず、作品内部に充分踏み入ることは意外に困難である。それに加えて、内容考察に至る以前の基礎的な問題に対しても、まだ充分な解答がなされていないように思う。例えば『冷笑』の位置についての疑問である。荷風の帰朝後の作品系列を考えて行った時、『冷笑』という作品が情緒的な性格を強く出している『すみだ川』の後に書かれているという事実に対して、私達はやや不思議な感じを覚えずにはいられない。『冷笑』を書き終えた後『新橋夜話』を皮切りに江戸趣味へと急速に屈折して行く荷風の姿を知っている私達には、『冷笑』

第一（『新帰朝者日記』に代表される当代日本の開化に対する批判）、第二（『すみだ川』に代表される郷土文学の試み）の統合ないし融和において、次第にその性格を明らかにしていったのが、荷風における享楽主義であった。そういう内的経路に主として焦点を定めた作品が『冷笑』であった。言いかえると『冷笑』は、日本開化批判と江戸趣味との調和の試みであり、同時にそれは、作家荷風の自己確立であった。

（『荷風のダンディズム』、『近代耽美派』昭42・9 塙書房に所収）

高田氏が以前から提出されているこの説明は、『冷笑』の意味づけとしてかなり高度な達成だと思われる。しかし、『冷笑』の位置に対する疑問に答えるトータルな説明としては、これだけではやや不十分の感がないでもない。更に別の視点から『冷笑』を考え、その位置の問題に解答を与える試みをもっとされてもいいのではないか。そして、その過程の中から『冷笑』に対する新しい意味づけが生まれて来るのではなからうか。

私はその意味で、『冷笑』という作品の成立過程をやや詳細に振り返ってみたい。荷風の小説の中で最も長い作品である『冷笑』は周知のように夏目漱石の依頼によって執筆された作品だが、その執筆に至るいきさつを調べてみると、意外に多くの外的な条件が作品の性格を規定しているように思えるからである。もちろん、一つの文学作品はそうした外的条件だけに規定されるものではないが、それが何らかの形で作品に投影されていることもまた事実であろう。その上、『冷笑』は「新聞小説」という荷風の作品にはあまりない形式で書かれたものだ。その外的条件について考えてみることも、一つの重要な作業であろう。私はこれから管見に入った種々な資料から、『冷笑』の性格を外部から規定するいくつかの要素の抽出を試みたいと思う。そして、そこから『冷笑』の位置に対する一つの私なりの解答を出してみたいと思う。

*

漱石の書簡集を繰って行くと、『冷笑』の成立に関連する二つの重要な書簡が目につく。一つは明治四十二年一月六日の午前に出された朝日新聞の池辺三山宛の書簡であり、もう一つは同年一月二〇日付の他ならぬ荷風宛の書簡である。後者は『冷笑』の起筆を示す周知の書簡だが、この二つの書簡の日付の差が示す二週間という期間に、問題を解く一つのカギが隠れている。まず前者、池辺三山宛の書簡に次のような一節があることに注意したい。

鏡花子のおとの小説はまづ森鷗外氏を煩はしてみる積に候
或は出来ぬかも知れず候へども其節は又何とか致す了見に候
その時「東京朝日新聞」には、泉鏡花の小説『白鷺』（明42・10・15―12・12）が連載されていた。漱石は一〇月一四日まで『それから』を連載していた上、一〇月二四日からは『満韓とところどころ』を連載していたのであるから、当然『白鷺』の次の小説を書く作家を物色しなければならなかった。そこに浮かび上がって来たのが鷗外だったのであり、そのことをこのように池辺三山に語っているのを見るとこの話は漱石の頭の中でかなりはつきりと具体化されていたように思われる。そこで、この書簡と同じ日付の鷗外の日記を見ると次のようにある。これは明治四十二年一月六日の全文である。

六日（土）。晴。靖国祭の為に登衞せず。夕に短詩会を催す。森田米松、石井柏亭臨時に列席す。森田に影と形の稿本を渡す。佐佐木信綱に古稀庵記を校せんことを托して持ち帰らしむ。此記は是日稿成りしなり。

ここには漱石から小説を依頼されたことなどは書かれていない。しかし、『冷笑』がすでに起筆されていることが明確なあの一月二〇日付の漱石書簡を考慮した時、その二〇日までには森田草平（米松）が鷗外を訪問したことは鷗外の日記には全く見られないのだから（因みに、草平が鷗外を訪問したことが次に出て来るのは一月一九日である）、当時漱石の下で働いていた草平がこの一月六日の訪問時に、小説を書いてほしいという漱石の依頼を伝えたことは充分推測出来るように思う。が、鷗外は種々な事情からこれを断わったのであろう。その理由は明確ではないが、一つここで考えられることは、漱石の依頼を断わった鷗外が、そのかわりに荷風を推薦したのではないかということだ。もちろん、これは推測の域を出ない。が、その前年に『あめりか物語』を出し、その年には発禁にはなったが『ふらんす物語』『歓楽』などを刊行しようとしていた荷風の帰朝後の活躍から見ても、漱石の依頼に荷風が充分応える力があることは鷗外にはよくわかっていただであらう。そのことは漱石においても同様であったに違いない。この荷風に『白鷺』の次の作品を依頼しようという動きは、急速に実現化されたように思われる。周知のように前述した明治四二年一月二〇日付の漱石の荷風宛書簡に次のようにある。

拝啓 御名前は度々御著作及西村などより承はり居り候処未だ拝顔の機を得ず遺憾の至に御座候 次今回は森田草平を通じて御無理御願申上候処早速御引受被下深謝の至に不堪候 只今逗子地方にて御執筆のよし承知致候御完成の日を待ち拝顔の榮を案み居候（傍点筆者）

私はここにある「御無理」とか「早速」とかいう言葉に注意したい。それには単なる儀礼的な文辭を越えて、当時の荷風執筆に至る複雑な事情とその動きが感じ取れるようだ。荷風は漱石の依頼を受けた時、即坐にそれを承諾しようである。帰朝後「新潮」「早稲田文学」「趣味」「新小説」「中央公論」などの有力な雑誌に作品を発表し続けていた荷風にとって「東京朝日新聞」の紙面を提供されたことは願ってもないチャンスであつたらう。その上、もし鷗外の推薦があつたとしたら、荷風が雑誌への執筆に急がしい中でこの依頼に対し即坐に承諾することは何ら不思議はないといえるように思う。

引用した漱石の書簡からは、もう一つ重要な事実が引き出せる。いうまでもなくそれは、一月二〇日ごろ荷風が逗子で『冷笑』を執筆していたということである。周知のように、逗子には永井家の別荘があつた。ここで私達は『冷笑』の「二 虫の音」の章が、他ならぬこの逗子を背景としているという事実を想起しなければならない。「二 虫の音」の章は銀行頭取の小山清が逗子の別荘に行き、小説家の吉野紅雨と初めて会う場面を描いた部分だが、小山と紅雨との会話になる前の前半の部分で詳細な海辺の描写がなされている。こうした自然描写は、議論を中心に展開する『冷笑』においては数が少なく、それ故に注意すべきものだと思う。更に、この章の設定時点が「十一月中旬の暖かい晴れた日曜日（註）の朝」となっていることも見逃せない。これらの事実を考え合わせると、次のようにいうことが出来るだらう。「二 虫の音」には荷風の一月二〇日ごろの逗子滞在での観察が充分組み

込まれているのであり、更にいえば「二 虫の音」が一月二〇日ごろすでに構想され書き出されていたかも知れないのである。

「二 虫の音」に先立つ冒頭の「一 さびしき人」は小山清を紹介した一章であり、全く背景はないしもちろん特別な時点の設定もない。とすると、この冒頭の一章は一月二〇日以前の、執筆を承諾した直後に起筆されたと考えられることも出来るように思う。結局、『冷笑』起筆の上限は池辺三山宛漱石書簡の内容から一月七日と考えられるわけであり、恐らく一月一〇日前後に『冷笑』は書き始められたのではないかと思われる。

ここで考えておきたいのは『すみだ川』と『冷笑』との間に書かれた『見果てぬ夢』が、『明治四二年一月稿』という日付を持つことである。私は今までの『冷笑』起筆時の検討や、『見果てぬ夢』の「一」の冒頭に「十月の夕日」とあることなどから『見果てぬ夢』の背景を一〇月末と考え、一月初旬にはすでに脱稿されていたのではないかと思う。明治四二年一月五日付の荷風が浅草から友人井上啞々に宛てた葉書に、「今二人でおまゐりをしてそれから花やしき例のカッドオはまだあかない。帰りは舟さ。向島の見えるのがしやくだよ。さうきち／とみ」というおどけた文章があるが、いうまでもなくこれは『冷笑』起筆以前のものであり、『見果てぬ夢』との関連で考えてみる必要があるだろう。

このような『冷笑』成立の背景をめぐって後日荷風と森田草平が回想している文章があるので、念のためそれを書き写しておきたい。まず、荷風は『断腸亭日乗』昭和二年九月二日の条で次の

ように回想している。

余漱石先生のことにつきては多く知る所なし、明治四十二年の秋余は朝日新聞掲載小説のことにつき、早稲田南町なる邸宅を訪ひ二時間あまりも談話したることありき、是余の先生を見たりし始めにして、同時に又最後にてありしなり。

「秋」という表現からみると、秋庭太郎氏が『考証永井荷風』（昭41・9 岩波書店）の中で指摘されたように、「漱石の手簡を受けて数日ならずして」荷風が漱石を訪問したといえるかも知れない。また、森田草平は現在『漱石先生と私』としてまとめられている昭和一八年に公けにした文章の一節で次のように述べている。

……私も、先生の命を承けて、同欄（*明42・11・25から始まった「朝日文芸欄」）開設前から方々へ原稿の依頼に廻った。（中略）先ずその手初めに、永井荷風（その頃は未だ牛込区余丁町に住んでいられたと思う）の許へ新小説の依頼に行った。気難かし屋で、短篇一つもなかなか承引されないように聞いていたが、先生の名で依頼したことであり、載る場所も朝日であったからであろうか、その時は快く承諾してくれられた。（原稿料は一回分金五円、その後も一切それに準じた。）それから鵜外先生のお宅へも随筆乃至評論の依頼に伺った。（第八章 朝日文芸欄時代）

但し、この回想は事情を正確には伝えていない。『冷笑』は別に「朝日文芸欄」のために書かれた作品ではないし、鵜外についての一節にしても、鵜外は明治四三年一月一六、一七日の「東京

朝日新聞」に小説『木精』を載せているのだから、これは草平の説明不足か記憶違いであろう。ともあれ、このような入り組んだいきさつの中から問題作『冷笑』は生まれたのである。

註1 『冷笑』に出て来る小山の「山際の別荘」は、実際の永井家の別荘対君山樓に類似していることが指摘出来るように思う。

2 明治四十二年一月中旬の日曜日は一四日であり、その前後に雨天はない。荷風はこの頃から逗子に滞在していたのかも知れない。

3 作品の中の「一」に「十日頃の片割月」とあるが、明治四十二年一〇月二三日が月齢一〇日に当たっている。『見果てぬ夢』の「三」「四」は「一」「二」から一週間ほど後の設定になっっているようだ。

*

『冷笑』が連載される一週間ほど前の明治四十二年二月七日の「東京朝日新聞」紙上に、森田草平が書いたと推定される『冷笑』の「小説予告」が掲載された。その全文は次の通りである。

短篇作家として、帰朝以来、文壇の視聴を萃めたる永井荷風氏は、初て我朝日紙上を通じて、長篇『冷笑』を公けにせられんとす。『冷笑』は氏が短篇より長篇に移る第一の作なれば、読書子の注意も亦更に新なるものあらむ。

これだけのものだが、『冷笑』を考える上で大事な問題を含んでいる。私はこの文章の中で、それまでの荷風が「短篇作家」と

規定されていることと、『冷笑』が荷風の最初の長編であることを強調する語気があることに注意したい。正に荷風に依頼されたのは長編小説に他ならなかった。「趣味」(明43・1)の「文芸界消息」の中に、「△永井荷風氏は朝日新聞に約八〇回の長篇『冷笑』を掲載し初めたり」という一節がある。この文章が明治四十二年の二月のうちに書かれたことは確かめられるので、かなり前から「約八〇回」という長さは決まっていたと見るべきであろう。(因みに、実際の『冷笑』は全七八回である。)明治四三年六月から同じ「東京朝日新聞」に連載された長塚節の「土」が、草平によれば「最初は四〇回位の約束で」(前出「漱石先生と私」)書き出されたのと比べてみても、荷風に寄せる期待はかなり大きかったといえる。一方荷風にとっても、八〇回もの長さを持つ作品は書いたことがなかった。『すみだ川』は新聞連載に換算してみると約二〇回であり、『新帰朝者日記』(明42・7稿)にしても三〇回を越えはしない。つまり、帰朝後に書いた短編の約三倍もの長さを持つ小説を書くことが義務づけられたのである。また「新聞小説」という性格上、一度掲載してしまえばもう書き直しが出来ないし、それを読む読者の数も多く人々の注目が集まるであらうから、荷風は執筆に当たっては慎重に、そして一層努力を傾けたであらう。「読売新聞」(明42・12・11)の「よみうり抄」の中に、「◎永井荷風氏は目下「朝日」に掲載する長篇『冷笑』を面会を謝絶して執筆中なり」とあるのも充分うなずける。

ここで一つ気になる事実がある。それは荷風が『書かでもの記』(大正七年稿)の中で打ち明けている、第三高等学校のフラ

ンス語の教師になろうと上田敏に相談したという事実である。結局これは実現せず、鵬外の推薦により慶応義塾の教授に荷風がなったことは周知の通りである。ここで注意したいのは、三高の教師になろうと上田敏に相談したのは、明治四二年中のことだという点である。「読売新聞」(明42・12・5)の「文壇はなしだね」の中で、荷風が三高のフランス文学の講師になるという評判が近ごろ高いことが、ややゴシップ風に伝えられている。こうした事実は、荷風が明治四二年の末に一つの転換期に立っていたことを示している。『冷笑』との関連でいえば、この長編一作に自己の文学創造のエネルギーの余りを全てつぎ込もうとしたことに他ならないのではないか。いってみれば、荷風は苦しみの中でこの記念すべき作品を執筆したのである。現在残っている当時の井上咂々宛の二枚の葉書は、そうした『冷笑』執筆中の荷風の生の姿を私達によく伝えてくれている。これらは、荷風が執筆のため修善寺に行った時のものだ。

一二時間ほど前に此処へついた処だがもう帰りたいくらいだ。自分はどうしても都会の人だね。(中略)僕は登美のことを一瞬間も忘れる事ができないよ。此分で行けば濫作もせんければならん僕は遠からず破滅すると覚悟してゐる。明日は帰る……(明43・1・1付、修善寺発)

新橋へつくと家へ帰ってもつまらない気になり春日へやる。此の夜の情懷実に格子先へふらふらやつて来る伊左も思ひやらる。来て見れば相手はおさしきで来ず。独り吞たくもない御酒。いくたび繰返しても同じ苦界のはかない経験。

(中略)健康よからず創作甚苦痛。君の新年いかがに候哉。
(明43・1・3付、京橋発)

私はここで荷風の『冷笑』執筆の苦しさをめぐって、内面からのみでなくもう一つの外的条件の存在について考えてみたい。それは、『冷笑』執筆の準備期間の問題である。その場合注目されるのは、『冷笑』の直前に「東京朝日新聞」に連載されていたのが、鏡花の『白鷺』だということである。漱石の日記の明治四二年八月二七日の条に次のようにあることに、まず注意しよう。

朝泉鏡花来。月末で脱稿せる六〇回ものを朝日へ周旋してくれといふ。池辺不在故玄耳へ手紙をつけてやる。

そして、翌八月二八日の部分に「泉鏡花来訪昨。昨日の礼を云ふ」とある。これはいったい何を意味するのか。いうまでもない。『白鷺』は鏡花の持ち込み原稿であり、すでに脱稿されその回数も最初からはつきりとわかっていたのである。(もともと、正確には『白鷺』は五九回である。)『それから』に引き続き『白鷺』は一〇月一五日から連載された。とすると、一二月中旬に終わることは、すでに最初からわかっていたのである。そのために、漱石は一月の初めに次の作者の人選を急いだのであろう。私は荷風への漱石の依頼と『冷笑』起筆の時期を、十一月一日前後だと推定した。連載開始までには何回分かは出来ていなければならぬだろう。そうすると、約八〇回の予定であった長編『冷笑』の執筆準備期間は一月足らずである。恐らく一度決めた構想を後で変えようとしても間に合わないであろう。そこに大きな困難な問題がある。周知のように、荷風は随筆『倦怠』(明43・5稿、

『紅茶の後』に所収)の中で次のように書いてある。

先頃朝日新聞の紙上に「冷笑」と云ふ小説を書いてゐた時、自分は其の日の朝机に向つて書き綴つたものが、毎日器械のやうに翌日の新聞紙に載つてゐるのを見て、何となく自分もいよいよ小説家になつた。作者になつた。筆を稼業にする専門家になつたやうな心持がして、何とも知れず一種の不安と不快を覚えた。

もちろん、この文章にはいくらかの誇張が存在しよう。が、荷風がかなり執筆に追われていたことは容易に想像されると思う。『冷笑』の準備期間が短いことと、執筆に追われ続けたのではないかという時間的な条件は、いったい作品の性格をどのように規定しているだろうか。

私達は、小山書店版『すみだ川』はしがき(昭10・10稿)に「秋八月のはじめに稿を起し十月の末に書き終る」とあることから、荷風がそう長くもない『すみだ川』にまる三月を費したことを知っている。それだけに、一年間の四季の移り変わりを背景にした『すみだ川』の透明な世界は、その練り上げられた文体と相俟つて発酵が充分に行き届いたものとなっているわけだ。しかし、『冷笑』はそうではなかった。荷風はその主題の発酵が充分に行なわれないままに、作品を書き出さなければならなかったのである。この事実が、作者の内部の生のままの心の動きが作品の中に直接出る可能性があることを示しているように思う。『冷笑』における主題の発酵は、作品を書き続けていく過程で行なわれたと考えるべきであろう。その意味からも、私は『冷笑』の世界を

一つの動的^{ダイナミック}世界として捉える必要があるように思う。優れた作品とは、作品自体の動きと作者の精神の動きとが互に拮抗し合つて緊張関係にあるところから生まれるのであろう。恐らく『冷笑』の場合、作品の動きの方が作者の精神の動きを越えているのであり、作者のブレイキによって押え切れなくなっている部分がいくつか存在しているのである。この点では、『新婦朝者日記』とは好対照である。『冷笑』よりもその文明批評的傾向を強く純粹に押し出している『新婦朝者日記』においては、作者の強い意志から生まれたブレイキがよく効き、作者の精神の動きが作品の動きにうまく乗ることによって激しい表現を生み出していた。『冷笑』において荷風は、『新婦朝者日記』におけるように自己の発想に適した特別な時点を設定しようとはしていない。それだけ作品の時点と執筆時がある程度一致して来るわけだ。

『冷笑』に設定されている時点は、周知のように明治四二年一月から翌年の春までである。次の表は、『冷笑』の各章と新聞掲載日、その設定時点を示したものであり、これから作品に設定された時点と新聞掲載日とがだいたい一週間から半月ほどのずれでもって進行していることが理解出来るように思う。

	初出日	回数	設定時点
一 さびしき人	12・13	③	なし
二 虫の音	19 16	④	「一月中旬」
三 楽屋裏	24 20	⑤	右から数日後であろう。少なくとも一月中旬である。

四	深川の夢	31	25	⑦	右と同日の夜。但し、内容は過去の回想である。
五	二方面	1	1	④	なし
六	小酒盛	5	4	④	浅草の年の市の日だから二月一八日
七	正月の或夜	9	8	⑤	初卯の日だから一月二日
八	京都だより	14	13	④	一月二日、三日
九	船の人	18	17	④	なし
一〇	冬の午後	22	21	④	「松飾りが取払はれた後の曇つた或日」一月中旬か。
一一	車の上	26	25	⑤	同 右
一二	夜の三味線	31	30	⑥	右から数日後であろう。
一三	都に降る雪	6	5	⑨	右の翌日
一四	梅の主人	15	14	⑧	「節分はもう大分前」とあるから二月中旬か。
一五	珍客	23	22	⑦	「春も末のこと」 * 初出では単に「春」とある。

荷風は『冷笑』を実際の時の流れに沿った形で書いてあるわけ

であり、そのためにその折々の感想が作品の中に入り込んでいるように思う。この中で最後の「一四 梅の主人」「一五 珍客」の二章だけが、やや先取りした形で時点を設定しているように思われる。恐らくそれは、この部分が『冷笑』の終結部であるためと、例の慶応義塾をめぐるいささつによって幾分か荷風の執筆ペースが変化したためであろう。鵜外が慶応義塾の教授になるよう荷風に依頼したのは明治四三年二月四日であり、荷風は翌々日の六日に鵜外を訪問している。その後の種々な交渉を反映してか、この最後の二章はやや散漫な描写が多いように思う。

*

鏡花の『白鷺』の存在は単に『冷笑』の準備期間が短いことを示すだけではなく、その他にも『冷笑』の作品傾向を規定する一つの条件にもなっているように思う。『白鷺』はどういう性格の作品であつたらうか。鏡花自身の筆になる『白鷺』の「予告」を見てみよう。

何しろ夏目さんの持場ですから、さてかはり栄もいたしませぬ、と作者が言ひます。ただ洗髪の芸子髻、膚の蹴出しは媚かしいが、三絃の音のきりりとした、江戸襦の色模様を、其処等の生のものでこらんに入れます。此段真に意気らしけれど、筆者が生来の野暮なしは（高い声では申されませんが）幽霊も一寸出る……長き夜の雨、朝寒のお伽草、先づ濡れ枯梗といふ小標題から。

『白鷺』は正にこうした情緒の世界であつた。荷風は後日、『谷

崎潤一郎氏の作品」(明44・9稿)の中で潤一郎と比較しながら、「鏡花氏の作品から窺はれる江戸情調は全然ロマンチックの脚色構想から生じたもので、作者の意識や憧憬が時としては強ひて読者を此の情調の中に引入れやうと勉めてゐる点がある」といつてゐる。また、『断腸亭日乗』大正六年二月三十一日の条において、「余の再読して批評せむと思へるものを挙ぐるに」として日本の古典から近代の文学一二編を記している中に「照葉狂言 泉鏡花著」の名をあげている。こうした鏡花に対する理解やその記述をみると、鏡花と荷風にはある一面でつながりがないでもない。荷風にとって、その頃すでに『照葉狂言』『湯島詣』『高野聖』『婦系図』などを発表していた鏡花は、やはり一目置く存在ではなかったか。荷風はまだこうした情緒的な作品で鏡花以上のものを書けるとは思わなかったであろうし、なまじつに充分な準備もせず感情の高まりのないまま作品を書いてしまえば、『白鷺』の直後であるだけに特色のないものになってしまうであろう。それよりも別の特色を出した方が、荷風にとっては賢明であつたのだ。

荷風は『冷笑』執筆に当たつて特殊な時点を設定せずに、その時その時の時間の経過に身をまかせた。いつてみれば、限定された季節を作品の背景とせざるを得ないのであるから、ここから情緒的な作品は生まれにくいであろう。そうした立場にいた荷風が、自己の主張を明確に出した議論を主とした文明批評的な傾向の作品を書こうとしたことは、充分うなずけることだと思ふ。その上、自己の分身を何人が登場させて議論をさせる作品を書けば、別に長編小説という性格をそう考慮して書かなくてすむ。分

身の数を多くしてその議論にバラエティを持たせれば、それでいいのだからである。また、そうした方が断続的に掲載されるという新聞小説の性格にふさわしい。しかし、そうした意味から生まれた『冷笑』における分身は、『新婦朝者日記』における分身と比べて大きな意義はないのではなからうか。同じように分身の議論によつて作品を進めるにしても、『新婦朝者日記』における分身の成立は、不安定な心情から抜け出そうとするやむにやまれぬ事情が存在していた。が、『冷笑』における分身の成立は、そうした緊張感のない一つの技法としての段階にとどまっているように思ふ。

ここで問題を少し深めてみよう。荷風が情緒的な作品ではなく議論の多い批判的な作品を書こうとした事実は、いったい私達に何を教えているだらうか。『冷笑』を書こうとした時点において、荷風の中に情緒的な作品でも批判性を前面に押し出した作品でも書ける可能性とその力があつたことを示しているのではないか。作品の形で表面に出て来るのは、いわば作者の思想感情の一部でありある側面に他ならない。作者の創作主体の中では、あらゆるものが混沌として存在しているのであらう。だから、作品の表面のみで作者の真の心の動きを云々してそれで足れりとすることは、作者の側から見れば迷惑なことであり、かえつて作者の持つ可能性とエネルギーを押えつけることになるのかも知れない。私はここで、荷風が明治四四年に『わくら葉』(明44・10稿)と『煙』(明44・12稿)という二編の「社会劇」を書いてゐることに注意せずにはいられない。つまり、『新婦朝者日記』や『冷笑』から二

年経った時においても充分その社会性は残っていたのであり、荷風の内部の批判的な精神は決して失われていないのである。もちろん、そうした批判性が作品に定着するにはあるきっかけが必要ではあろう。私がここで指摘したいのは、情緒的な『すみだ川』が書かれたからといって、荷風の中の批判性が全く消え去ったのではないということである。

いちいち例をあげるまでもないと思うが、『冷笑』の中にはその前後の他の作品にある発想や表現と類似したものがかなり多く存在している。『冷笑』とその前後の作品はそうした形で関係しているわけだが、その事実は『冷笑』という作品が決して作者の帰朝後の諸傾向の一つの弁証法的な統一、帰結であるということの意味しているのではない。事情は逆ではなかったか。誤解を恐れず逆説的にいえば、『冷笑』から荷風帰朝直後の諸作品は生まれたのである。『冷笑』と他の作品とにおける類似した発想や表現を見て行くと、『冷笑』におけるその方が作品の世界にびつたりせず成功したものとはなっていない。が、それは当然であろう。ある一つの発想や表現は『冷笑』という混沌とした世界にあるよりも、それを引き立たせるように形成された作品世界にある方が光り輝やくからである。つまり、『新帰朝者日記』にしても『すみだ川』にしても、それは作者の中にある種々な側面の一つが、それを表現するのにふさわしい一つの方向に純化されて出来た作品なのであり、『冷笑』の存在こそその諸傾向が確実に荷風の内部にあったことの証明に他ならないのである。

私はやっと『冷笑』の位置に対する疑問に答えられる所に行き

着いたようだ。『冷笑』が『すみだ川』の後に書かれていても、別に不思議はないのである。『冷笑』の成立には種々な外的条件があった。私達はこれまで、そうした外的条件が内的条件以上に『冷笑』の世界の性格を規定しているのを見て来た。『すみだ川』から『冷笑』へという道程は、こうした種々な外的条件の存在を考えれば不思議はないのであり、逆に『冷笑』は『すみだ川』の後に書かれているからこそ『冷笑』たる所以があるといえるのではないか。『冷笑』の世界には種々なものが存在している。そして、重要なのはそれらがある一つの秩序によって並んでいることだ。そこに一つの変化が示されているのである。『冷笑』はその作品の存在自体が、荷風の帰朝直後の作品系列の帰結を示しているのではない。逆に、その系列の変化が『冷笑』内部の構造の変化に現われているのであり、そこにこそ『冷笑』の類いまれな性格がある。『冷笑』が長編小説であるが故に、そしてそれが作者のその折々の自由な発想にまかされたまま書き続けられたが故に、その動きが作品の内部に定着されたのである。そして、そうした外的条件の存在こそ、その変化を作者の中に自然に促す働きをしたのである。

* 本稿は昭和44年12月7日の「早大国文学会大会」での研究発表を基礎として、加筆したものである。本稿の論旨による『冷笑』内部の分析については別稿を用意したいと思う。なお、考察の途中において鵜外との関連で大屋幸世氏から有益な助言を得たことを記しておきたい。(一九七〇・三・四)